

一九九五年

第十回十亀記念会
第九回十亀賞記録

十亀記念事業委員会



十亀先生について今思うこと

小林隆 児

十亀先生がお亡くなりになって早十年余りを経過しました。今でもとても残念に思うことは、私は十亀先生と直接親しくお話す機会を持てなかったことであります。振り返ってみると、唯一直接お会いできたのは、九州で毎年夏に開催していましたが自閉症療育キャンプにゲストとして参加された時でした。夜シンポジウムが開かれた際に、私の隣の席に十亀先生がいらっしゃいました。しかし、当時私はあまりにも若輩で、とても十亀先生と親しく言葉を交わせるような立場ではありませんでしたので、先生のお話に耳を傾けるだけでした。今でも鮮明に思い出すのは、その時先生が最近結婚指輪がなかなか抜けないようになったことを漏らされたことでした。恐らく当時から全身に浮腫があったのでしょう。体調が悪いのを承知で参加して下さったのではないのでしょうか。

十亀先生がお亡くなりになったその年に、私は自閉症に関する学位論文をまとめ、ある雑誌に発表しましたので、自閉症研究の道ではお互いすれ違いの人生になってしま

ました。このことは私にとってかえすがえす残念に思えてなりません。十亀先生について直接はあまり知らない私ではありますが、論文集を拝読して思うことは、先生ほど自分の体験に基づいて幅広く自閉症論を展開できた人は、残念ながら今日まで他には見当たらないのではないかということだと思います。十亀先生は自閉症の人々の心をととてもよく分かっていた方だと痛感します。さらに自閉症の障害についても神経心理学的観点から鋭い指摘をされました。精神分析学を中心とした心理学的観点から生物学的観点までを視野に入れた自閉症論を展開されていたのですから、その見識には本当に驚かされます。私は、学会などで自閉症について発表する度に、もし十亀先生に率直な意見をいただけたらどんなに励みになっただろうに、と思うことが少なくありません。一度でいいからコメントをいただきたかったなと今でも心から思います。

十亀記念会のもう一つの役割

小 西 眞 行

この記念会の十年は、私にとっても、また恐らく、関わった多くのあすなる職員にとっても自立の過程だったと、今の会が終わってみて思います。

先生はあすなるにとって、大きな父親であり、唯一の大人でしたから、職員は皆この父親にほとんど依存しきっていました。決して死んではならぬ父親の思いがけない死で、(誰か、ヒョットシテ我々ガ父親ヲ殺シタノダロウカ：)私どもは一樣に依存対象を失い、方向を見失い、あたふたとしていました。

私も例外ではなく、残された医師として、先生の死で中断した幾つもの仕事を、医局のメンバーと分担し、慣れぬままやり始めました。無様でも、自分で方向を見出し、自分の足で歩くことを余儀なくされたのです。

このように、皆がどうしていいか分からず、自分のことで精一杯のなかで、この会はあすなるが無秩序に拡散してしまうのを防ぎ、あとに残された私どもの自立の歩みを可能にするのに、大きな力になっていたように思えるのです。

自閉症の療育を先生はどのように考え、何を実現しようとしていたのか。この十年間、毎年九月の第二土曜日を軸として、私どもは一心に考える機会を与えられました。また、追悼集を作り、講演集を編集し、全国の受賞者を訪問して報告集にまとめ、先生の開拓者あるいは人としての生き方をなぞろうと努力しました。

この会は先生の障害児療育の思想を継承・発展させ、広く世に問う運動であっただけでなく、あすなるの立場から一職員として振り返ると、先生亡き後のあすなる学園の存続と自立にとっても不可欠のものでした。この会を抛り所にしながら、そのために優に十年の歳月を要したといえなくもありません。

発行日 1996年3月
発行元 十亀記念事業委員会
三重県三重郡菟野町杉谷1573
印刷・出版 株式会社 伊勢出版
津市藤方亀の越977

編集後記

大きくひろがれ、深く深く育て

十年の長い間十亀事業委員会にかかわったすべてのみなさまに心よりお礼を申し上げます。

会を閉じるにあたり編集委員一同、十亀先生がめざされた「生きること、愛すること、働くこと、考えること」がみなさまにメッセージとしておとどけ出来たかと反省しきりです。でも長い間私共を支えて下さった何千人にもおよぶ皆様のご指導により無事編集を終了することが出来ました。これも十亀先生の残されたものをみなさまひとりひとりが大きく育ててくださった賜ものと思っております。

先生のご家族をはじめ、最後まで暖かく見守りご協力をいただきましたみなさまに厚くお礼を申し上げます。ほんとうに有難うございました。

報告集 編集担当委員一同

